

## 存在と本質の実在的区別について ——トマス・アキナス『有と本質』第四章を中心に——

上枝 美典（京都大学研修員）

### 序論

神において、その存在(esse)と本質(essentia)は同一であるが、神以外のもの、すなわち、被造物においては、その存在と本質は別のものである。

これが、トマス・アキナスの思想における中心命題の一つであるということは、現在の主だった研究者達の一致した見解である。しかし、その「区別」が、どのような意味の区別であるかについては、トマスの死後七百年以上経った現代においても、必ずしも一致した見解が得られておらず、今なお論争が続けられている。

この論争は、大雑把に分けて、存在と本質が実在的に区別されると主張する人々と、その区別が単に概念的なものにすぎないと主張する人々との間で行われている。(注1)

我々は、この小論で、この論争の全体像を扱うことはできないし、また、それが我々の意図なのでもない。我々が意図するのは、トマス・アキナス自身が、「存在」と「本質」をどのように理解し、それを自ら思想の中で、どのように用いようとしているかを読み取ることである。

我々が今回取り上げるテキストは、『デ・エンテ』第四章である。『デ・エンテ』、正確には、"De Ente et Essentia"（『有と本質について』）と現在呼ばれている小論文(注2)は、トマス・アキナスの最初期に書かれたもので、存在と本質の意味、類・種・種差などの普遍概念と本質との関係、更には、自然的物、天使、神など様々なものにおける本質と存在の関係、など、彼の存在論の骨格となる事柄が主題的に論じられる、トマス存在論研究における基本資料の一つである。

その中でも、今回我々が注目するのは、第四章にある次の議論である。

「全ての本質ないし何性は、その存在について何も認識されていなくても認識され得る。例えば、私は、人間や不死鳥の何であるかを、それが実在の世界に存在するかどうかを知らなくても理解することができる。ゆえに、存在が本質ないし何性と別である事は明らかである。」(注3)

この議論を手懸かりに、トマス存在論の基本的性格について考えることが、本論の意図である。以下の論述では、便宜上、この議論を「人間と不死鳥の議論」(homo/fenix argument)と呼ぶことにする。

### 1. 問題点の指摘

さて、一見すると、この議論は、人間や不死鳥の「何であるか」、即ち、定義によって示される本質的内容の中に、その存在についての情報が含まれていないという、単に概念的、認識論的な区別をもとにして、存在と本質の区別を結論しているように見える。確かに、人間の定義には、「実在の世界に存在する」ということは含まれていないし、「不死鳥」のように、それが実在するかどうか解らない

場合でも、「不死鳥」が「何であるか」を知ることは出来る。しかし、この事実から明らかになるのは、「本質」という言葉に対応する概念の中に「存在」という言葉に対応する概念が含まれていないという、概念の包含関係だけであり、それ以上の実在的な事実は何ら明らかになっていないとも考えられる。そう考えるならば、もしもトマスが、この議論によって、存在と本質の実在的な区別を証明しようとしていたのなら、それは、証明として極めて不十分であることになる。このことから、この議論に対して、「明らかに安易な、論理的領域から存在論的領域への移行」を犯しているという批判を加える研究者もいる(注4)。

しかし、この批判を無条件に認めるわけにはいかない。なぜなら、トマスは、これ以外の箇所では、概念や認識の次元から実在の次元への移行に対して、極めて慎重だからである。例えばそれは、トマスがアンセルムスの神の実在論証(注5)に対してとった態度に現れている。

周智のようにアンセルムスは、「それ以上大きなものが考えられ得ないもの」という神の定義から、神が人間の思惟の中だけでなく、実在の世界にも存在することを論証しようとした。しかしトマスは、このアンセルムスの論証を認めない。例えば、同じ初期著作の一つである『命題集注解』第一巻の中でも、トマスは次のように論じている。すなわち、神の定義から、「神が実在しなければならない」という要請が導き出されたとしても、その事から、「神が実在する」という事実が示されるわけではない。寧ろ、神の実在を証明するためには、神の定義において、「それ以上大きなものが考えられえないもの」と言われたそういう「もの」が、先ずもって、実在している事が前提されなければならない。(注6)

アンセルムスの論証に対してこのような議論を行うトマスが、ほぼ同時期に執筆した『デ・エンテ』において、一転して「安易な移行」を行っているとは考えにくい。では、この「人間と不死鳥の議論」は、どのように解釈すべきであるのか。

現在、この問題について、様々な研究者が、様々な解釈を提案している(注7)。それゆえ、我々は、次の順序で考察を進めたい。第一に、現代の研究者による代表的な解釈として、オーエンスと、ポビックの提案を見る。第二に、我々の解釈を提案し、最後に、我々の立場から、それぞれの解釈の問題点を指摘する。

## 2. 代表的解釈の概観

### 2. 1 オーエンスの解釈

ジョセフ・オーエンスは、一九六五年に発表した論文「聖トマス・アクィナスにおける何性と実在的区別」(注8)以降、一貫して、「人間と不死鳥の議論」は、単独では実在的区別の証明にはならず、実在的区別が証明されるためには、この議論の後にある、神の存在論証を読み込まなければならないと主張している。

彼の提案のポイントは、以下のとおりである。「人間と不死鳥の議論」は、基本的に、トマスにおける、知性の二つの働きを考慮に入れて読むべきである。人間の認識能力には、本質を捉える働き(単純把握)と、存在を捉える働き(判断)がある。「人間と不死鳥の議論」で言われているのは、本質を捉える働きによって捉えられた内容に、別の働きによって捉えられるべき「存在」が含まれていないという事実だけである。これは、例えば、視覚によって捉えられる「色」の中に、聴覚によって捉えられる「音」が含まれていないという事実を指摘するのに等しいのであり、この事実から、色と音の実在的な関係を云々することができないのと同様に、この議論から、存在と本質の、実在における関係を証明することは出来ない。何故なら、この場合、実在的には同一のものが、人間の異なる認識能力によ

って、異なる観点から、あたかも別々のものであるかのように認識されている可能性が残るからである。ゆえに、「人間と不死鳥の議論」は、せいぜい、存在と本質の、単なる概念的な区別を示しているに過ぎない。

それでは、存在と本質の實在的区別は、どの時点で証明されるのであろうか。それは、この直後にある、神の實在論証においてである。神は存在それ自身である。トマスは、この『デ・エンテ』第四章の中でも、その証明を行っている。しかしこの証明は、『デ・エンテ』第四章の議論の流れの中では、「存在」が、単なる概念や論理形式ではなく、本来、実在する「もの」であることの証明として位置付けられるのであり、言わば、「存在の實在性の論証」として読まれるべきものである。「存在」は、この論証によって初めて、實在において積極的な内容を持つ「もの」(natura)として認められ、存在が、単なる論理や概念ではなく、実在物であることが示される。しかし、「もの」としての存在、即ち、「存在」本来の姿・「存在」の正体は、唯一絶対の「神」である。それゆえ、この世界に存在する多数の事物の「存在」は、「もの」としての「存在」自体ではありえず、「もの」としての存在から分有されたものである。そこには、「分有するもの」としての本質と、「分有されるもの」としての存在との間の区別が認められる。そしてこの区別は、単に概念的なものではなく、實在的な区別である。

何故なら、もしも、この区別が単に概念的なものであるならば、実際の世界に在るものの真の姿は「存在」であり、本質は、その一つの側面が、本質を捉える知性の働きを通して、知性に現れたものに過ぎないことになる。しかし、独立存在する「もの」としての存在は、神に他ならない。それゆえ、この場合、世界に実在するものは全て神であるという意味での汎神論を主張することになる。のみならず、もしも事物における存在と本質との区別が全く概念的なものにすぎないのであれば、かつてパルメニデスが行った議論によって、世界内の事物の多数性は失われ、この世界には唯一神のみが存在する事になる。ゆえに、神以外の事物における存在は、それ自身とは實在的に異なる何か、即ち本質に受け取られ、本質は存在を受け取ることによって、また、存在は、本質に受け取られることによって、一つの「もの」が実在するものでなければならない。

以上が、オーエンスの基本的な立場である。

## 2. 2ボビックの解釈

ジョセフ・ボビックは、一九六五年に発表した『デ・エンテ』の翻訳及び注解書(注9)の中で、次の様な議論を行っている。

「人間と不死鳥の議論」は、一見、概念の次元から、實在の次元への移行を示しているようにみえるけれども、この議論が行われている場が正確に理解されるならば、そのような移行は存在しないのであり、存在と本質の實在的区別を示す証明として、十分に有効である。先ず第一に、彼は「本質」という用語を『デ・エンテ』第一章の論述に結びつけて厳密に理解し、その理解を前提として、この箇所を読む事を提案する。

即ち、「本質」(essentia)という言葉は、事物が、人間の認識から独立して存在するための、實在における根源であり、同時にまた、事物が認識され得るものとなるための、實在におけるひとつの根源である(注10)。即ちそれは、實在が知性に関係し、實在が知性に影響を与えるための、實在の側の根源を指す言葉である。

また、トマスの認識論によれば、本質を捉える働きは、人間知性の直感的な働きである。この働きによって、人間は、事物の本質を常に全体として捉える。これは、人間の知性が、認識内容の点で、実在する本質に対して可能態にあることに因る。人間の知性は、世界に存在する諸事物の本質の内容

に関しては、全くの可能態に在る。本質は、この意味で可能態に在る知性に対して、現実態として働きかけ、知性を認識内容の点で現実化する。もちろん、人間知性は、一旦このようにして捉えた本質内容に対して、独自の働きかけを行い、命題を作り、推論することで、知性独自の認識活動を行うことができる。それゆえ、厳密な意味で「真・偽」が問題になるのも、このような、判断・推論する知性の認識内容である。しかし、今問題になっている本質の直感的な認識は、知性独自の働きではなく、実在する本質と、知性的能力との、言わば、相互作用の結果である。それゆえ、事物の本質に関する認識は、知性と本質が出会う場所であり、認識論的領域と存在論的領域とが接する場所なのである。

本質の認識を、このように理解するならば、或る事物の本質の中に、その事物の存在が含まれていないと言われる時、それは、単に、概念的なレベルで、本質がその存在に関する了解とは無関係に考察され得るということだけを意味しない。本質認識は、概念のレベルと実在のレベルが出会う場所であり、精神が実在に触れ、実在が精神に接する場所である。そのような場において、本質が、存在なしに理解され得るという事実は、知性が、単に主観的に、事物の本質をそのようなものとして認識しうるのだということよりも寧ろ、人間の認識能力と、事物の本質との相互作用の結果として、「本質には存在が含まれていない」という認識が、他ならぬ本質そのものによって、精神に与えられているという事を意味する。「人間と不死鳥の議論」は、基本的に、このような場所において、理解されるべきである。そして、そのように理解されたこの議論は、事物における本質と存在の現実的な区別を十分に証明するものである。

ポピックの解釈は、凡そ、以上のようにまとめられる。

### 3. 我々の解釈

#### 3. 1 『デ・エンテ』第四章の議論の構造（概観）

以上、現代の二つの対照的な解釈を概観したので、次に、この箇所の論述に対する我々の解釈を述べる。まず第一に、『デ・エンテ』第四章の議論の基本的な構造の解釈を示し、それに基づいて、「人間と不死鳥の議論」の位置付けを考える(注 11)。次いで、「人間と不死鳥の議論」におけるトマス自身の意図を考察することにより、この議論の現実的性格について、我々の意見を述べる。

先ず確認しておかなければならないことは、この『デ・エンテ』第四章の論述自体は、神以外の事物全てに見出される複合を、現実態と可能態の複合として証明することを目指しているということである。これは、「人間と不死鳥の議論」が、次の様な言葉によって導入されていることから明らかである。

「それゆえ、このような実体は、質料を持たず形相だけであるが、しかし、それらにおいて、あらゆる意味における単純性がある訳ではなく、またそれらが純粋な現実態なのでもなく、却って、可能態との混合を持っている。そしてこれは、次のようにして明らかである。」(注 12)

実際、「人間と不死鳥の議論」の後には、存在と本質の複合を、現実態と可能態の複合と読み替えるための、詳細な議論が続いている。先ずそれをごく簡単に要約しておこう。人間と不死鳥の議論で示されるように、通常、存在と本質は、別のものである。しかし、もしも、本質と存在が同一であるもの、すなわち、そのものの本質が「存在」であるようなものがあるとしたら、そのようなものは唯一つでしかありえない。それは、万物の存在の第一原因として実在し、それ以外のすべてのものは、自己の存在を、その第一原因から受け取る。したがって、この存在の第一原因以外のものどもは、自己の存在に対して可能態に在り、そこには、可能態と現実態の複合が見出される。そして、この、存在

に関する可能態と現実態の区別こそが、被造物における存在と本質の区別の意味なのである。

議論の構造をこのように理解するならば、存在と本質との実在的区別は、神の存在論証において証明されるというオーエンスの主張とは異なり、寧ろそのような実在的区別は、更にその後に論じられる、被造物における現実態と可能態の複合の証明において最終的に結論されていると思われる。それゆえ、我々の解釈によれば、存在と本質の実在的区別が、「人間と不死鳥の議論」の段階において証明されている必要はない。

しかし、「人間と不死鳥の議論において、実在的区別が証明されている必要はない」ということは、その議論において、単に概念的区別が証明されているに過ぎないということを直ちに意味するのではない。トマスが、この議論において、何らかの意味で実在的な区別を既に示そうとしていたという可能性も、十分に残されている。それゆえ、次に、この問題についての我々の見解を示す。

### 3. 2 「人間と不死鳥の議論」の実在的性格について

「人間と不死鳥の議論」は、それ自体を独立で考察すると、存在と本質の実在的な区別を証明しているとは思えないし、議論の構造上も、ここで実在的区別が証明される必要はない。にもかかわらず、この箇所の前後の表現を考慮すると、この議論が、単に概念的な区別を示すためだけに導入されるとも思えない。トマスは確かに、この議論において、単に概念的なことではなく、実在的な、即ち「もの」に関する何らかの事態を考えている。では、どのようにして、それが可能であったのか。

これを理解するためには、やはり、「本質」(essentia)という言葉の含蓄する意味に目を向けなければならない。本質とは、essentia というこの綴りが示しているように、「存在」(esse)と深いつながりを持つ言葉である。もともと、essentia は、ギリシャ語のウーシアの訳語として、esse から作られた言葉である。それゆえ、essentia は、何よりも、実在するものの essentia であり、事物のありのままの姿を精神に対して開示するものである。それゆえ、トマスの思想は、一面において、そのような本質の性格に信頼することによって成立していると言えるだろう。事物の本質は、常に、自己のありのままの姿を精神に向かって開示している。それに信頼することが、全ての学知の前提になっている。では、そのようにありのままに開示された事物の姿の中に、「実在する」ということが含まれていないとすれば、それは、本質自らが明らかにした本質そのものの姿のなかに、「実在」が含まれていない事を意味するであろう。ところが、今述べたように、実在するものは必ず何らかの本質を持ち、本質を持つものは、必ず実在する何らかの事物である。それゆえ、その事物が持つ実在は、その事物の本質以外の何かから、本質に到来しているものでなければならない。トマスによれば、その「何か」とは神であるが、しかし、この「人間と不死鳥の議論」の段階では、それが何であるかは未だ確定されていない。しかし、この段階で、本質そのものと、その本質の実在との実在的な区別が、少なくとも、更に明らかにされるべき事実として指摘されているのであり、それゆえにこそ、その後の議論は、この実在が、どこから本質に到来するのかという、まさに存在論的レベルでの問題に移行しているのだと思われる。そうでないならば、つまり、実在が、本質に、どこから到来するかという問題が、実在の次元で設定されていないならば、その実在の第一原因として証明される神の存在が、そもそも実在的な次元で問題にならないのではないだろうか。

たしかに、「人間と不死鳥の議論」は、本質と存在の区別が実在的であることを、論理的に「証明」する議論ではない。しかしそれは、「本質」即ち「エッセンチア」の含意を前提に、本質と存在の実在における区別を、事実として明らかにする議論であり、その意味で、一種の「論証」(デ・モンストラ

チオ) (注 13)であると考えられる。以上が、現時点における我々の解釈である。

#### 4. 諸解釈に対するコメント

オーエンスは、存在と本質の實在的区別が証明されるためには、前段階として、「存在」という言葉で表現されている対象が実在することが証明されていなければならない、そして、言わばその存在の實在性は、神の實在論証によって、初めて証明されると考える。一言で言えば、存在と本質の實在的区別の理解は、「神が実在する」という理解を前提するという主張である。

確かに、存在と本質の實在的区別を示すためには、存在の實在性を証明することが必要であるという彼の指摘は重要である。存在が、単なる概念や論理構造でないということは、存在と本質の實在的区別を証明するのに先立って、確認されていなければならない。しかし、彼が主張するように、この存在の實在的性格が、ただ神の實在論証によってのみ認識されうるかどうかに関しては、検討の余地が残されていると思われる。特に、『デ・エンテ』冒頭にある、「知性によって第一に捉えられるのは、有と本質である」¥(P70)(注 14)¥(P100)というトマス言葉は、神の實在論証の前提となるような、實在の理解を示している可能性があるだろう。

ボビックは、本質の實在性を前提した上で、人間の本質認識が、認識の次元と實在の次元が接触し、一緒になる場所である事を強調する。これは、本質の實在性と、本質認識の實在に対する強い関係、その意味での本質認識の實在的側面を強調する解釈と言える。

我々は、本質に関する理解に関しては、おおむね、彼の解釈に同意する。しかし、人間の本質認識によって捉えられた本質が、實在の世界と、人間の認識が一つになる場である事を強調し、それによって、「人間と不死鳥の議論」が實在的区別を十分に証明している点には、同意しない。

何故なら、その場合、本来の意味での外界の實在性のほかに、本質認識の實在性というものを新たに設定しているようにみえるからである。これは、「實在」という言葉の意味に新たな混乱をもたらすものである。ボビックが、本質認識という新たに設定された實在の場において、本質と存在の関係を論じているのだとすると、そのような場において理解された實在的区別が、一体如何なる實在性を意味するかについて、更に別の議論が必要になるであろう。

#### 結び

「人間と不死鳥の議論」の正確な理解は、「本質」という言葉の正確な理解に依存する。オーエンスとボビックの違いも、両者の本質理解の違いに由来すると言いうことができるだろう。我々は今回一つの解釈を提案した。それは、いわば存在の實在性を強調するオーエンスや、本質認識の實在性を強調するボビックとは異なり、ちょうどオーエンスとは逆に、本質の實在性に注目することで、「人間と不死鳥の議論」の實在的性格を救おうとするものである。しかしこれは、あくまでも一つの解釈であり、他の解釈との比較検討の中で、本質に関する我々の理解を、更に深めていかなければならない。

【注】

(1) 一口に「実在的区別」と言っても、それは様々な解釈の総称に過ぎないのであり、Cunninghamの報告によると、現在、五十種類以上の解釈が、「実在的区別」の名称によって呼ばれているらしい。(文献 11)

(2) 現在は"De ente et essentia"という呼称で統一されているが、この著作が成立した当初は、確定した名前を持っていなかった。レオニナ版の『デ・エンテ』の校訂者による序文では、この著作に与えられた二十にのぼるタイトルのリストが掲載されている。(三五三頁)

(3) Omnis autem essentia uel quiditas potest intelligi sine hoc quod aliquid intelligatur de esse suo: possum enim intelligere quid est homo uel fenix et tamen ignorare an esse habeat in rerum natura; ergo patet quod esse est aliud ab essentia uel quiditate. (*De Ente et Essentia*, c.4, ll.98-103.)

(4) Few Thomists are happy with this apparently easy transition from the logical to the ontological order: patet ergo, "From this it is clear." (Cunningham, op.cit., p.245.)

(5) Anselmus, *Proslogion*, c.2-3 (PL) 158,227-228).

神の概念から神の実在を証明しようとするこの論証は、哲学的には「存在論的証明」あるいは「本体論的証明」(argumentum ontologicum)と言われる。トマスは一貫して、この種の証明を認めていない。

(6) cf. *In I Sent*, d.3, q.1, a.2. 第四異論、異論解答。

(7)本論で取り上げたオーエンスとボビックの研究以後に発表された主な文献を、本論の末尾に挙げる。もちろん、これら以外に、過去七百年のあいだに蓄積された膨大な数の文献がある。これらに関する最も詳細な文献リストは、11 に、トマスの『デ・エンテ』第四章の議論に関する文献リストは、6 に収められている。

(8)文献 2

(9)文献 1

(10) The word "essence", recall, designates what is at once that in a real thing by which the thing exists independently of human knowledge about it, and that in the real thing by which the thing is intelligible. It designates that which is at once both a principle of independent existence and a principle of intelligibility. (Bobik,op.cit., pp.167-168.)

(11) 『デ・エンテ』第四章全体の議論の構造に関するより詳細な研究に関しては、拙論「『デ・エンテ』第四章における存在と本質」(『中世哲学研究』第十一号、一九九二年、五九〇-七〇頁)を参照。

(12) Huiusmodi ergo substantie, quamuis sint forme tantum sine materia, non tamen in eis est omnimoda simplicitas nec sunt atus purus, sed habent permixtionem potentie; et hoc sic patet. (*De Ente et Essentia*, c.4, ll.90-93.)

(13) 「論証」(demonstratio)の語義は、「明らかに示すこと」である。

(14) ens autem et essentia sunt que primo intellectu concipiuntur, ... (*De Ente et Essentia*, PROLOGVS, ll.3-4.)

【文献】（年代順）

1. J.Bobik, *Aquinas On Being and Essence* (Notre Dame, Ind., 1965).
2. J.Owens, "Quiddity and Real Distinction in St Thomas Aquinas", *Mediaeval Studies*, XXVII (1965) pp.1-22.
3. A.Maurer, *Thomas Aquinas On being and essence* 2nd ed. (Toronto, 1968), pp.19-27.
4. J.F.Wippel, "Aquinas's Route to the Real Distinction: A Note on De ente et essentia, c.4", *The Thomist*, XLIII (1979) pp.279-295.
5. Owens, "Stages and Distinction in De Ente: A Rejoinder", *The Thomist*, XLV (1981) pp.99-123.
6. Wippel, "A Reply to Fr. Owens", in his *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas* (Washington, D.C., 1984) pp.120-132.
7. L.Dewan, "Saint Thomas, Joseph Owens, and the Real Distinction between Being and Essence", *The Modern Schoolman*, LXI (1984) pp.145-155.
8. Owens, "Being and Nature in Aquinas", *The Modern Schoolman*, LXI (1984) pp.157-168.
9. S. MacDonald, "The Esse/Essentia Argument in Aquinas's De ente et essentia", *Journal of the History of Philosophy*, XXII:2 (1984) pp.157-172.
10. Owens, "Aquinas' Distinction at De Ente et Essentia 4.119-123", *Mediaeval Studies*, XLVIII (1986) pp.264-287.
11. F.A.Cunningham, *Essence and Existence in Thomism: a mental vs. the "real distinction?"* (Lanham/New York/London, 1988).